

「小児の審美的修復」

長崎大学歯学部小児歯科学講座教授

後 藤 讓 治

略 歴

東京都出身

昭和 38 年 東京歯科大学卒業

昭和 42 年 東京歯科大学大学院卒業

昭和 42 年 東京歯科大学講師（小児歯科学講座）

昭和 45 ～ 47 年 カナダ国 Western Ontario 大学客員助教授

昭和 47 年 東京歯科大学助教授

昭和 58 年 長崎大学歯学部教授（小児歯科学講座）

要 旨

近年、審美歯科学の重要性が強調されるようになり、また一般の理解も次第に深まりつつある傾向がみうけられるのは喜ばしいことである。小児歯科においても、いや小児歯科においてこそ審美性の追求が重要であると発育審美歯科学の立場から常日ごろ考えているものである。

なぜならば、対象が成長発育を続ける小児のうちから、その土台となる基礎を造り上げていかねばならないからである。

日本でも、知的水準の向上と共に齲蝕は確実に減少に向う傾向が読みとれる。他方、歯が美しく調和がとれていることは文化性の現れを認識される時代に向いつつある。

13世紀、トーマス・アクイナスは、美と善とは実体は同じものであると説く。現代ではさらに文化性イコール美であるとの認識が深まり、美への感度を一段と強める時代へと向うものと予測できる。

そして、美しいものは機能も優れているとのイメージをあたえる。歯科医学はおよそ審美性抜きに成り立たないにもかかわらず、従来機能が優先されてきたきらいがある。

これまで、小児歯科医は、あまりに齲蝕の治療に追われすぎたのではないだろうか。

そろそろ歯科医師も「痛い歯を治す人」とのイメージを変える時代が当来しているのではないだろうか。

そして、口腔機能が正常に発揮できることのみならず、口腔の健康、すこやかさ、さらに美しさの増進に努力を傾け、積極的に美しい容貌の育成に力を注ぐ歯学を考慮することが必要ではないだろうか。